

親鸞さまの

【本文】

しょうどうもん
聖 道門のひとはみな

しん
自力の心をむねとして

たりきふしぎ
他力不思議にいりぬれば

しんち
義なきを義とすと信知せり

【意記】

聖道門 己を抛り所とし、己の力によつて成仏する教之の人は皆

自分の心を最上の抛り所にしています。

一方 人には到底捉えきれない程の阿弥陀様の大いなる心を抛り所にさせて頂くならば

自分を抛り所にする限り成仏できないうことがはつきりと知らされます。そして同時に、阿弥陀様を抛り所にする以外に成仏道はないことがはつきりと知らされるのです。

【私の味わい】

最近「映画を早送りで観る人たち（稲田豊史著）」という本を読みました。昨今の若い人たちを中心に、映画を早送り、倍速でみるのが次第に多くなっているそうです。その原因としては、ネットを介して膨大な作品が見放題であること、情報過多、時間のコストパフォーマンスを求めること、無駄な時間を使いたくないがあるそうです。例えば、あらずじに関係しそうな要所の出来事は標準速度で見ると、沈黙や視線のやり取り、人物、歴史的背景の描写など余分に見えるものは、倍速、あるいは飛ばす。極端な例では、最初と最後だけ観る、というものもあるそうです。

一つの物語を、情報として右から左に処理して、自分中心に有益かどうかを判断する。物語の中には、登場人物の喜怒哀楽の共感、自分だったらどうするかと考える。衣服や食物から文化を感じたり：等色々な豊かさがあるはず。それを過度に単純化し、自分中心に無駄、有益を断じていくことに懸念を覚えます。

お経は、阿弥陀様が私達を救おうとされる心と道筋を示された物語です。仏様を心の抛り所にせず、自分を最上の抛り所にして善悪、無駄、有益を決めていく。自分中心の人間をいかに導き、極楽の道を歩めしめようか、という物語です。

その物語エンディングは、既に紀元前にお経の中に説かれています。しかし、その内実は実際に物語自体に当たってみないと、結末とその意味は分からないでしょう。だから、法話ばかりくりとその豊かさに自分自身で触れていくことが大切です。（悠本